

類し、更に戰國樣式(秦樣式)を區別して夫々の「型」を抽出設定し得たのである。

本書の著者は、「この型は無精神のものであらうか。さうでは無いのである」と言はれる。さうした「型」に對する技術的・唯物的見解にとゞまることなく「型」―技術―を超えた藝術意欲の作用に問題の焦點を求められたのである。而もそこに時代を問題にし民族を問題にされたのである。著者長廣氏の書かれたものが常に問題を提示される所以と思ふ。

長廣氏の書かれたものを讀むと支那考古學に關心をもつてゐる者には深い反省が興へられる。支那考古學は歴史考古學にこそ問題の重點が存することは斷言できよう。横への單なる唯物的な自然科學的な擴がりを避けて支那精神の理解といふ點に問題を深く掘り下げようとする場合、先史考古學には底の見えた限界の存することを如何ともし難い。私は支那精神の深い理解を問題とするが故に歴史考古學にこそ問題の重點が存するといふことをしじみみ思ふのである。

かくて支那の歴史考古學を研究の對象とする場合、從來云々ざれ來つた文獻か遺物かは長廣氏の書かれたものを讀む度に私はいつもさう思ふのであるが眞の問題ではなくなつて來る。文獻成立の背後にあるもの遺物成立の背後にあるものともに共通した一つの世界を豫想せしめるからである。といふことは私は支那の歴史考古學を研究する場合文獻か遺物か何れかに偏するには、支那古代世界はあまりにも宗教的であり倫理的であり象徴的であると

思ふが故である。

著者は本書に於いてまづ帶鉤の「型」を分類され、この分類によつて明らかに實用的でないもの、存在を見出されてその裝飾意匠を考察される。次に出土地の判明したものにより時代の一つの基準が求められてゐる。更に工藝史上の一般樣式と帶鉤の關係が述べられ、帶鉤が周漢時代の社會生活にもつづいたものであり帶鉤の文化史的意義が論ぜられる。そして最後は周漢美術の背景として古代支那工藝精神―抽象性―が極めて明快に結論されてゐる。

一 小工藝品にすぎない帶鉤の研究によりよく周漢時代の思想世界を明らかにし、ひいては支那工藝の基本精神を見出されんとされたものであることを知ることができよう。帶鉤の形式分類からのかゝる深い追究に今更の如く著者の鋭い洞察と豊かな教養と深い學問的落つきとを羨しくさへ思ふのである。(澄田正一)

## 彙報

昭和十八年十月史學科講義題目

國史

普通國史概説(第一部) 西田教授 2

國史概説(第二部) 中村助教授 2

特殊國家思想の發達 西田教授 2

武家社會の家族	藤 助教授	2	特殊	民族興亡史	原 教授	1
奈良時代の文化	東伏見 講師	2		スコラ學及びゴテーク	鈴木 助教授	2
室町時代の政治及び社會	魚澄 講師	2		ローマ帝國と基督教との關係	井上 助教授	2
國家史の諸問題	柴田 講師	2		帝政獨逸の東亞政策	中山 講師	2
近世の思想	吉田 講師	20		獨逸史學思想	井上 助教授	2
實習	史學史の研究	1	演習	アリストテレス政治學	原 教授	2
日本の經濟生活に關する諸問題	西田 教授	2		近代歐洲の東方進出	原 教授	2
東洋史				史學研究法	原 教授	1
普通	東洋史概説(第一部)	2	普通	史學研究法		
特殊	東洋史概説(第二部)	2	普通	地理學		
隋唐時代に於ける地方行政	宮崎 助教授	2	普通	地理學通論(第一部)	小牧 教授	2
南宗時代の通貨問題	那波 教授	2	特殊	地理學通論(第二部)	野 濱 教授	2
南洋華僑史	宮崎 助教授	2		日本地政學	小牧 教授	2
滿鮮上代の文化	田村 助教授	2		政治地理	室賀 講師	2
元代公牘の研究	梅原 教授	2		南方地政論	別枝 講師	20
フテペルの研究	安部 助教授	2		フランス地理書講讀	室賀 講師	1
元朝の財政と財政政策	石濱 講師	2		ドイツ地理書講讀	野間 講師	1
講讀	愛宕 講師	2	演習	地理學實習	野間 講師	2
南海關係史籍講讀	宮崎 助教授	2	演習	地理學の諸問題	小牧 教授	2
演習	田村 助教授	2		考古學		
嫩焯發見民間文書の研究	那波 教授	2	普通	考古學概論、日本考古學	梅原 教授	3
西洋史			特殊	滿鮮上代の文化	梅原 教授	2
西洋史概説(第一部)	原 教授	2		支那の彫塑藝術	水野 講師	2
西洋史概説(第二部)	鈴木 助教授	2				

希臘的美術

村田 講師 2

奈良時代の文化

東伏見 講師 2

講義 南海關係史籍講讀

田村 助教授 2

實習 考古學實習

梅原 教授 2

演習 日本考古學の諸問題

梅原 教授 2

日本精神史

普通 日本精神史概説

西田 教授 2

武士道論

高山 助教授 2

副 科目

國史 日本古文書學

中村 助教授 2

史籍講讀

藤 講師 1

日本神祇史

宮地 講師 20

美學 亞細亞に於ける印度美術の位置

上野 講師 2

昭和十八年九月卒業者史學科卒業論文題目

國史專攻 十七名

中世に於ける國民的自覺の問題

和田 邦平

——特に鎌倉時代の精神基盤に就いて——

穂月 敬吾

平安時代初期に於ける密教の展開に就いて

石川 通

日本精神史の根本問題

岩田 正太郎

——院政の發生について——

梅 溪 昇

元祿歌舞伎の社會史的背景

加賀谷 邦夫

近世に於ける日本文化研究と國學の精神傾向

熊田 重邦

近世初期に於ける思想展開と備學

熊田 重邦

報 雜

近世士道說序說

水戸藩を貫くもの

徳川時代博物館の發達に就いて

近世都市精神の一考察

東山時代に於ける公卿の學問と思想

上代神祇思想の一考察

町人倫理

——主として元祿享保時代の上方向町人に就いて——

陽明學と徳川幕府封建制度

徳川末期に於ける商業官營論の展開

北畠 親房

東洋史專攻 十名

西漢の官吏階級

江幡 眞一郎

唐代の土地問題

織田 敬直

金代物力錢の研究

白木 龍雄

明末清初に於ける準噶部の興起

武田 清

王充の周圍

坪井 俊孝

——後漢前半代に於ける生活の原理について——

波多野 善大

隋高祖文帝の佛教治國策について

藤本 勝次

太平天國籌餉考

眞能 駿彦

清朝回部に於ける伯克について

丸山 靜

抱朴子に於ける術の思想とその道教的進展

明代土地問題の展開

丸山 靜

第二十八卷 第四號

九一

西洋史專攻 二名

Henri IV の外交政策に就いて  
十九世紀前半に於けるロシア工業  
— 農奴解放の前提として —

泉 倭雄  
川上 達雄

地理學專攻 八名

アメリカ大陸問題の展開

東北亞細亞の地政學的考察

日本地政學より見たる南米の性格  
— 獨立問題を中心として —

パレスチナ問題の地政學的考察

インドネシア民族の生成

交通上より見たるイランの地位

大陸邊疆の民族政策

波斯灣の地政學的考察

考古學專攻 一名

高句麗の壁畫古墳に就いて

樋口 隆康

史學研究會

例會 六月十二日(土)午後一時より史學科第一教室に於て左の如く開催。

一、所謂「地理上の發見」の  
歴史的意義についで

文學部講師 前川貞次郎氏

一、銅鼓考

本會評議員 海原末治氏  
教授 文學博士

前川氏講演は本號掲載論文中に包含せられ、梅原氏のそれは近く發表豫定につき、ともに要旨を省略す。

讀史會

例會 六月十六日(金)午後六時半より樂友會館第六號室に於て開催、西田教授、藤助教授、柴田講師以下約三十名出席し、左記の如く研究發表があつて九時半散會した。

- 一、三社託宣の信仰に就いて 助手 内藤 晃氏
- 一、武家儀禮と藝能 助教授 藤 直 幹氏

西洋史讀書會

例會 昭和十七年度第五回例會を六月五日午後二時より樂友會館にて開催。出席者、原教授、鈴木井上兩助教授以下二十五人。

一、A. v. Harnack, Reformation und ihre Voraussetzung.

二回生 衣笠 茂君

二、J. Beloch, Der Verfall der antiken Kultur.

二回生 原田 邦夫君

例會 昭和十七年度第六回例會を七月三日午後二時より樂友會館にて開催。井上助教授以下十二人參會。

一、基督教の支那進出 選科生 宋村 夢奎君

二、F. Meinecke, Droysen. 二回生 植田 高史君

地理學談話會

例會 七月十日(土)午後三時半より地理學實習室に於て開催。左記の研究發表あり、小牧教授をはじめ出席者十九名。

一、シオニズムと英國

岡本信太郎氏

一、カムチャツカについて  
 一、謀略は目の前にある  
 三上 正利氏  
 小牧 教授

小牧教授は昨春行はれた教授の放逐に對する反響として、北米合衆國の某誌に現れた論文につき言及してある海外特派員の新聞記事を紹介し、その取扱方が東京、京都或はその他の地方によつて異つてゐることを指摘して新聞の態度といふものに注意を促さねるところがあつた。

會 報

◇會員動靜

◇入 會

京都市伏見區深草西出町八五 辻井喜一郎氏  
 京都市下京區東山五條上ル 山崎 謹哉氏

大阪市天王寺區味原町九九田中ビル内 (右二氏 藤岡謙二郎氏紹介)  
 田中 稔氏

◇轉 居

芦屋市杖東一五七二 野田好太郎氏  
 新京特別市同徳臺陸軍軍官學校官會卅一 小倉 親雄氏  
 奈良市法蓮佐保川町 水野方 藤井 貞文氏

◇寄贈交換圖書

教 學	九の四、五、六、七	國民精神文化研究所
考古學雜誌	三三の四、五、六	日本考古學會
國學院雜誌	四九の五、六、七	國學院大學雜誌部
國語・國文	一三の六、七、八	京都帝大國文學會
史 學	二一の三	三田史學會
史學雜誌	五四の六、七、八	史 學 會
史迹と美術	一四の五、六、七	史迹・美術同政會
史 苑	一五の二	立教大學史學研究室
宗 學 研 究	二五、六合併號	大谷派本願寺宗學館
社會學徒	一七の五	社會學徒 社
社會經濟史學	一三の二、三、四	社會經濟史學會
人類學雜誌	五八の六、七、八	日本人類學會
「神道と民俗學」(柳田國男)		明世堂書店
神道論(紀要4)古文書古記録影寫副本解題		大倉精神文化研究所
帝國學士院紀事	二の二	帝國學士院
哲學 研 究	二八の六、八	京都哲學會
東方學報 東京	一四の一	東方文化學院
長崎談叢	三二	長崎史談會
西之京美術讀本		鶴 故 郷 會
武士道の大義(軍事史研究昭和十八年春期號)		軍事史學會
文 化	一〇の五、六、七	東北帝大文學會

民族學研究	新一の五、六、七、八	民族學協會
蒙	古 一〇の六、八	善隣協會
龍谷史壇	三〇	龍谷大學史學會
立命館大學論叢	一四(歴史地理篇四)	立命館出版部
歴史學研究	一三の五、七	歴史學研究會
歴史地理	八一の五、六、八二の一	日本歴史地理學會